6. 日露関係（２）：日露友好のエピソード

6.1. プチャーチン使節の訪日

1843 年 7 月 10 日（露暦は一12 日）　海軍少将エフフィーミー・ワシーリエヴィチ・プチャーチン Евфи́мий Васи́льевич Путя́тин（1803 年 11 月 20 日〜1883 年 10 月 28 日）のシベリア委員会への意見書アヘン戦争後の 1842 年の南京条約締結を踏まえ、英国との競争に負けないよう全権代表を中国に軍艦で派遣し、あわせてサハリン島などの探検と日本との交渉の再開を提案。「レザーノフ使節の場合と異なり、船を直接に首都の江戸の港に入れれば成功がより期待できるように思える。長崎ではオランダ商館の商人が交渉を妨害するべく万策を尽くすだろう。」ニコライ 1 世は提案を受け入れ、8 月 28 日、日本皇帝宛親書に署名したが、対英政策で慎重な外相･蔵相に反対され、派遣延期となる。

プチャーチン

1852 年 3 月　艦隊を派遣し日本に開国を求める計画が米国にあることがわかる。

5 月　ロシア、日本への使節派遣を決定し、プチャーチンを使節に選任。

10 月 19 日　プチャーチン、パルラダ Палла́да 号でクロンシュタット港を出港し、英国ポーツマス港に向かう。

11 月 24 日　米国、ペリー艦隊、日本へ向け出発。

1853 年 1 月 30 日　ロシア、プチャーチン艦隊、日本へ向け英国ポーツマス港を出発（英国で船を調達）。

3 月 11 日（露歴 2 月 27 日）　「日本との交渉についてのプチャーチン宛外務省追加訓令 730 号」

通商上の利益の達成こそ真に重要であるので国境問題については寛大でよい。つまりクリル諸島のうち、ロシアに属する最南端はウルップ島でよい。

そのほか、日本の国法に従い、江戸ではなく長崎に入港せよとの指示を含む（もと長崎商館医師でドイツ人シーボルトの提案）。

夏　プチャーチン艦隊、喜望峰を周り、シンガポール、香港を経由、小笠原諸島父島二見港に到着し、東洋艦隊の 3 隻と合流して、パルラダ号を旗艦とする 4 隻の艦隊を編成。このとき追加訓令を受領。

7 月 8 日　米国ペリー艦隊（旗艦サスケハナ号以下 4 隻）、江戸湾・浦賀に入港。

8 月 22 日　プチャーチン長崎入港。宰相ネッセリローデの書簡の受け取りを要請。

9 月 21 日　日本側、ネッセリローデ書簡を受け取る。

10 月 4 日　トルコ、ロシアに宣戦布告（クリミア戦争勃発）。

11 月 1 日　ロシア、トルコに宣戦布告。

11 月 8 日　筒井肥前守政憲、川路左衛門尉聖謨（としあきら）（1801 年 6 月 6 日〜1868 年 4 月 7 日）、露西亜応接掛に任命され、長崎へ出立。

川路聖謨

11 月 18 日　プチャーチン、いったん長崎を出港。

1854 年 1 月 3 日　プチャーチン、長崎に再入港。

1 月 18 日　プチャーチンと日本側全権・筒井肥前守政憲、副全権・川路左衛門尉聖謨との交渉開始。

2 月 5 日　第 1 次交渉終了し、プチャーチン、長崎出港。

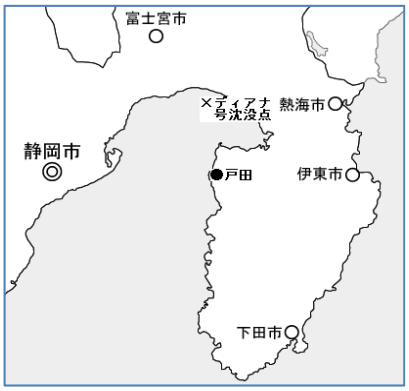
2 月 21 日　クリミア戦争でロシア、英仏に宣戦布告。

3 月 28 日　英仏、ロシアに宣戦布告。

1854 年 3 月 31 日　日米和親条約締結、日本開国へ。

10 月 21 日　プチャーチン、ディアナ Диа́на 号で、箱館入港。

11 月 8 日	プチャーチン、大坂湾に入る。幕府、下田回航を要請下田入港。
12 月 4 日	プチャーチン、下田入港。
12 月 22 日	日露、第 2 次交渉開始（下田玉泉寺）。
12 月 23 日	安政の東海大地震[1]（推定マグニチュード 8.4）起こる。この地震により、13 メートルの津波が下田港を襲い、ディアナ号損壊。下田はほぼ全滅（総戸数 856 戸のうち 813 戸流出、25 戸半壊）。
1855 年 1 月 19 日	ディアナ号を西伊豆の戸田（へだ）で修理することになり、戸田沖まで曳航するも暴風雨で海が荒れて漂流、宮島村（現富士市三四軒屋）沖で沈没。宮島村村民も安政の東海大地震の被害を受けていたが、乗組員を救助。
1 月 24 日	幕府、戸田村（戸数約 600 戸、人口約 3000 人）でのロシア艦建造を許可。同日、ロシア使節団約 500 人、戸田村に到着。プチャーチン提督、幕僚、士官用宿舎は宝泉寺、下士官用宿舎は本善寺と決定。日本最初の西洋式帆船の建造が戸田の船大工の手により始まる。
1 月 31 日	交渉再開（下田）。
2 月 7 日	日魯通好條約（日露和親条約・下田条約）調印。
5 月 8 日	プチャーチン、ヘダ号で出港。
1856 年 12 月 7 日	日露和親条約、批准書交換。



ディアナ号沈没地点と下田・戸田

ヘダ号の模型

[1] この地震の起こった日は旧暦では嘉永 7 年 11 月 4 日であり、安政元年は旧暦 11 月 27 日から始まるが、一般にこの地震を「安政の東海大地震」と呼んでいる（なお、翌 1855 年 11 月 11 日・旧暦 10 月 2 日の「安政の大地震」とは別だが、混同している文書が多い）。

6.2. 宣教師ニコライ[2]の活動[3]

6.2.1. 宣教師ニコライの日記の発見

宣教師ニコライ（本名イヴァーン・ドミートリエヴィチ・カサートキン Ива́н Дми́триевич Каса́ткин, 1836 年 8 月 13 日～1912 年 2 月 16 日）は、幕末から明治期にかけての日露文化交流の最大の功労者であるが、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた。

1912 年（明治 45 年）2 月 16 日のニコライ大主教の死後、ニコライ大主教の書き残した日記その他の文献資料は関東大震災（1923 年 9 月 1 日）で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）の創建者であるニコライ大主教は、名は知られながら知られざる人物であった。

1979 年、中村健之介·東大教授、ニコライ大主教の日記[4]がレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）の古文書館に保管されていることを確認。

6.2.2. 宣教師ニコライの生い立ち

1836 年 8 月 13 日（露暦 1 日）、イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、スモレンスク県ベーリ郡ベリョーザ村（Берёзовский погóст, Бéльский уезд, Смóленская губéрния）の教会の輔祭の子として生まれる。郡教会付属初等学校、郡神学校を経て、1860 年ペテルブルグ神学大学を卒業し、「ゴロヴニンの手記（『日本幽囚記』）によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭として来日することを決意し、箱館ロシア領事館付司祭に任命される。

6.2.3. 宣教師ニコライ来日までの経緯

1855 年 2 月 7 日	日露通好条約（下田条約）調印。
1858 年 10 月 24 日	プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチ（Ио́сиф Анто́нович Гошке́вич, 1814～1875 年 10 月 5 日）、箱館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー・マーホフ（Васи́лий Ма́хов）が領事館付き長司祭（протоиере́й）として着任。しかし、マーホフは着任時すでに 60 歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院[5]（Сино́д）に後任の派遣を要請（日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求めた）。
1860 年 7 月 4 日（露歴 6 月 22 日）	24 歳のカサートキン、応募者 4 名の中から選ばれ、剪髪式を受けて修道士となり名をニコライと改める。
12 日（露歴 6 月 30 日）	ニコライ、ペトル・パウェル祭の日にサンクトペテルブルグ神学大学の十二聖使徒聖堂で司祭に叙聖。
8 月 13 日（露歴 8 月 1 日）	親兄弟たちと別れ日本に向けてシベリア横断の旅に出発（シベリアを馬・船で横断）。この別れのときに父ドミートリーからもらったキリストの聖像は生涯ニコライの自室にあったと言われる。
9 月下旬	ニコラエフスク（Никола́евск）[6]に到着し、当地で越冬中のアラスカで宣教の経験を持つ、のちのモスクワ府主教イノケンティ（Митрополи́т Иннокéнтий Московский＝Ива́н Евсеéвич Попо́в-Вениами́нов, 1797 年 8 月 26 日～1879 年 3 月 31 日）と出会い、聖書と

[2] 最終的には大主教に叙聖されたので、「ニコライ（日本）大主教 Архиепи́скоп Никола́й Япо́нский」とも言う。日本ハリストス正教会では「亜使徒聖ニコライ」あるいは「聖ニコライ」と呼んでいる（http://www.orthodoxjapan.jp/ [2011 年 5 月 9 日アクセス]）。

[3] 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波書店、1996 年）および注 3 の年表を参考にしている。

[4] 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記（全 9 巻）』教文館、2007 年。本学、キリシタン文庫に所蔵。

[5] 正確には最高宗務院（Святéйший Прави́тельствующий Сино́д）。ピョートル 1 世により創設されたロシア正教会を監督するための国家機関。

[6] 現ニコラエフスク・ナ・アムーレ（Никола́евск-на-Аму́ре）。

祈祷書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる。

1861 年 7 月 14 日　ロシア軍艦アムール号で箱館に到着、領事館に着任。

6.2.4. 宣教師ニコライ、日本を学ぶ

?〜1864 年　西蝦夷警備のため派遣された秋田の久保田藩兵とともに箱館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎について日本語・日本史（『古事記』、『日本外史』）などを学ぶ。

1864 年 4 月　航海術を学ぶため箱館に来た新島襄（当時 22 歳、のちの同志社創設者）について日本語・日本史などについて学ぶ。

1868 年　新島の脱国・渡米を助けた攘夷派宮司の沢辺琢磨（さわべ・たくま、洗礼名パウェル、1834 年 2 月 13 日〜1913 年 6 月 25 日）を含む 3 名にキリシタン禁制下、洗礼を授ける。

1869 年初め　日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン（下田条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861 年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任）、これを支援。

6 月 20〜27 日　函館[7]五稜郭戦争。

1870 年　日本宣教団（日本伝道会社）設立。団長に任命され、修道司祭から掌院に昇叙される。『宣教師ニコライの全日記』は、この年ペテルブルク滞在中の日記から始まる。

1871 年 3 月初め　函館に帰任。露和辞典を編纂刊行。

6.2.5. 宣教師ニコライの布教活動

1872 年 1 月　東京神田駿河台（現在のニコライ堂の所在地）に宣教団本部（本会）を設立。布教活動開始。

明治期の日本ハリストス正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも 4 ないし 5 人（1877 年、在日外国人宣教師は、カトリック 45 名、プロテスタント各派 99 名）。→正教会は日本人伝教者による伝道が中心。

1873 年　明治政府、「切支丹禁制」の高札を撤去。

1875 年　パウェル沢辺、函館で司祭に叙聖。

1876 年　東京本会に女学校、正教神学校を創立。

1877 年 11 月　機関紙『教会報知』第 1 号発行。

1879 年春　東京復活大聖堂建設資金募金のため 2 回目の一時帰国。

1880 年　ペテルブルクでプチャーチン一家と親交を深める。掌院から主教に昇叙。ドストエフスキーと会う。11 月、日本に帰国。12 月、山下りん、イコン制作修得のためペテルブルクへ留学（1883 年帰国）。『教会報知』に代わり、『正教新報』発刊。

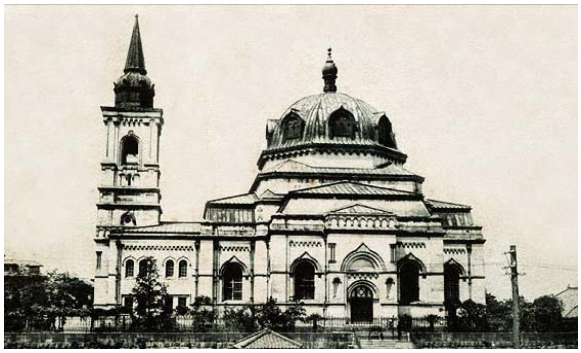
1881 年　群馬県・東北地方を巡回。

1882 年　九州、中国、四国地方を巡回。パウェル中井木蒐麿（なかい・つぐまろ）とともに奉神礼用諸書の翻訳を開始。大阪に伝教学校を開設。

1884 年　プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987 年帰国）。東京復活大聖堂着工。

1891 年 3 月 20 日　東京復活大聖堂竣工。

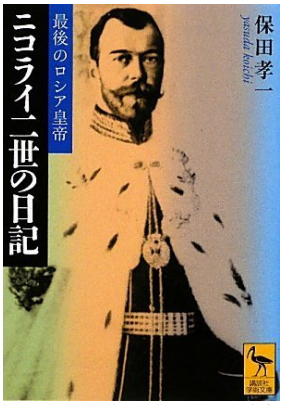
1891 年 5 月　皇太子ニコライ来日（4 月 27 日〜5 月 19 日）。大津事件で負傷した皇太子を京都の常盤ホテルに見舞う（5 月）。北海道、九州の諸教会を巡回。



創建当時の東京復活大聖堂（ニコライ堂）

[7] 函館市ホームページによると、箱館から函館へと名称が変更されたのは 1869（明治 2）年のことであるという（http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/yowa/yowa_contents/yowa_001.htm [2011 年 5 月 9 日アクセス]）。

6.3. 皇太子ニコライの訪日



6.3.1. ニコライ 2 世の日記

ロシア帝国最後の皇帝ニコライ 2 世 Никола́й II, Никола́й Алекса́ндрович Рома́нов （1868 年 5 月 18 日～1918 年 7 月 17 日）は、1882 年（14 歳）から銃殺される 3 日前の 1918 年 6 月 30 日（西暦 7 月 13 日）まで 51 冊の日記を書き残している。

ニコライ 2 世の日記はモスクワのロシア連邦国立アルヒーフ（史料館）に保存されており、1983 年 9 月（当時はソ連中央国立十月革命史料館）、外国人としてはじめて日本の保田孝一岡山大教授が閲覧した。

保田孝一は『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』[8]を書き、ニコライ 2 世が「大津で津田三蔵（つださんぞう）に斬りつけられたことを根に持ち、日本人を『猿』と軽蔑し、日露戦争を仕掛け、日本を征服しようとした」人物であったとの俗説を覆すニコライ 2 世像を描き出した。

6.3.2. 皇太子ニコライ（当時 22 歳）の訪日（1890［明治 23］年 11 月 4 日～1891 年 8 月 16 日）

6.3.2.1. 全日程

軍艦「アゾフ記念 Па́мять Азо́ва」号で、オーストリアのアドリア海に面するトリエステ港［現イタリア］を出港。長崎[9]到着時のロシア軍艦は 7 隻。

エジプト（ナイル川をアスワンまで遡行）、スエズ運河、インド、セイロン（現スリランカ）、シンガポール、ジャワ島、サイゴン（現ホーチミン）、ショロン（ホーチミン郊外）、バンコク、香港、広州［コワンチョウ］、揚子江を漢口［ハンコウ］（現武漢［ウーハン］）まで遡行、長崎（1891 年 4 月 27 日～5 月 5 日）、鹿児島、神戸、京都、大津（5 月 11 日）。

6.3.2.2. 日本旅行の詳細

4 月 25 日　「私の心はずっと以前から長崎にある。予定より 2 日前に長崎に到着できるのがうれしい。そこでの停泊はすばらしいという話だ。」

4 月 26 日　「日本旅行の準備のために『お菊さん』[10]を読み始めた。」

4 月 28 日　「12 時に有栖川宮威仁親王[11]が艦にやってきた。彼は 1889 年にガッチナ宮（サンクト･ペテルブ

---

[8] 保田孝一『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』講談社学術文庫、2009 年（朝日選書 1990 年版の再版）。

[9] 1855 年 2 月 7 日の日魯通好條約（日露和親条約・下田條約）締結後［1875 年 5 月 7 日のサンクト・ペテルブルク条約（千島樺太交換条約）締結後との説あり］、長崎はロシア東洋艦隊の越冬地となっていたため、ロシア海軍にはなじみの土地であり、長崎に滞在する海軍士兵への慰問も兼ねて、皇太子ニコライの日本での最初の寄港地として選ばれたと考えられる。

[10] ピエル・ロティ（Pierre Loti）、本名ルイ・マリー＝ジュリアン・ヴィオー（Louis Marie - Julien Viaud, 1850 年 1 月 14 日～1923 年 6 月 10 日）の小説。野上豊一郎翻訳が岩波文庫から、関根秀雄訳が河出文庫から、根津憲三訳が白水社から、それぞれ出版されている（いずれも著者名はピエール・ロチとなっている）。ピエル・ロティは現役フランス海軍士官にして作家であった。ロティは、1885 年と 1900 年に長崎に滞在しており、1 回目の滞在経験をもとに、日記形式の小説『お菊さん』を書いている。現代日本人の立場からこの小説を客観的に評価するのは難しい。「かれは皮肉たっぷりに、日本人のすることなすことに驚き呆れて見せて、さんざん日本と日本人の悪口を言っている。だが、じっさいに目に映ったこと、耳に聞こえたこと、舌で味わったことを、一切の感傷を排して率直に写生的に書き記したことも事実で、そこからかえって、お菊さんへの情愛、長崎への愛着が色濃くにじみ出ているように感じられる。しかも、同じ作品の中に、かれがお菊さんの母親の家を見て、その当時フランスの上流階級で流行っていた過度に華美な装飾としての **Japonisme**（日本趣味）は偽物だと断ずる箇所があることから、日本的な簡素の美というものがたしかにあることが、かれにはわかっていたことがうかがわれる」といった評価がある一方で、「あまりにも日本や日本人をこきおろしており、差別用語大満載の書物」との評価もある。また、米国人ジョン・ルーサー・ロングが小説として書き、米国の劇作家デーヴィッド・ベラスコが戯曲とし、これらに基づいてプッチーニが作曲したオペラ『蝶々夫人』もそうだが、「現地妻」という、現在の立場からするとジェンダー論的に大いに問題となる存在を肯定的に描いていることなどもこれらの作品が厳しく評価される理由かも知れない。しかし、少なくとも、皇太子ニコライはこれを読んで、ますます長崎と日本の訪問に胸をふくらませていたことが、その日記からは窺われる。

ルク郊外の離宮）を訪れたことがある。好感の持てる人物だ。」

「長崎市の家屋と街路はすばらしく気持ちのよい印象を与えてくれる。いたるところ掃除が行き届き、こざっぱりしていて、彼らの家の中に入るのが楽しい。日本人は男も女も親切で愛想がよく、中国人と正反対だ。とくに驚いたのはロシア語を話す人が多いことだった」。

この日ニコライは 7 軒の商店を訪れた。江崎鼈甲店[12]にはそのときにニコライが名刺代わりに与えた「善人江崎栄造殿　皇太子ニコライ」と書かれた肖像写真が現在でも残っている。

「昼食の後に右腕に竜の入れ墨をする決意をした・・・竜は見事に彫られており、腕はまったく痛まなかった。」

5 月 4 日　「稲佐村のゴリツィン（長崎駐留将校）宅へ直行した。そこで何人かの将校の奥さん（日本人妻）と知り合いになった。・・・彼女たちの間に座る。彼女らはみなロシア語をしゃべり非常に好感が持てる。」[13]

その後（日本側その他の史料によると）、ロシア仕官寄宿所、福田半造方に行き、そこで芸舞妓 5 名を招き、5 日午前 4 時帰艦。

5 月 6 日　鹿児島の島津忠義邸を訪問。忠義の贈呈した薩摩焼の壺がエルミタージュに残されている。島津忠義・忠重親子はその後も日露交流を推進。

5 月 9 日　神戸入港、午後 6 時過ぎ、列車で京都着。京都市盲唖院を訪問し、京都市に 2,000 円を寄付[14]。

5 月 11 日　琵琶湖遊覧の帰途、大津町（現、大津市）で警衛中の滋賀県巡査・津田三蔵に斬りつけられ、頭部に軽症を負ったが、同行のギリシア王子ゲオルギオス[15]と二人の車夫に助けられた[16]。

「有栖川宮殿下その他日本人の茫然とした顔を見るのはつらかった。」

5 月 13 日　「日本のものはすべて 4 月 29 日（大津事件のあった日の露暦）以前と同じように私の気に入っており、日本人の一人である狂信者がいやな事件を起こしたからといって、善良な日本人に対し

---

[11] 有栖川宮威仁（ありすがわたけひと）親王（1862 年 2 月 11 日～1913 年 7 月 5 日）。皇族、海軍軍人。1881 年 1 月 9 日から 1883 年 6 月 6 日まで英国海軍大学留学および仏米訪問、1989 年 2 月から 1890 年 4 月まで米、仏、英、露、スペイン、スイス、北欧各国歴訪等の国際経験を買われて、皇太子ニコライの接待役を命じられていた。

[12] 1709 年創業の鼈甲専門店の老舗。サンクト・ペテルブルクの中央海軍博物館に、皇太子ニコライが 5 代目江崎栄造から贈られた鼈甲（べっこう）製の「アゾフ記念」号の模型が残されている。

[13] 長崎の稲佐地区には、ロシア海軍士官の住宅、ロシア海軍軍人向け商業施設や料亭（諸岡まつの経営する Вóлга が有名）、「ロシア将校集会所」や「ロシアマタロス休憩所」（1860 年開所）等の遊興施設などがあって［このことは、長崎が 1855 年以来のロシア東洋艦隊の越冬地との説を補強する］、ロシア海軍関係者で賑わっていた。ロシア海軍士官は、その住居に「現地妻」を置いている者もおり、女中、下男、従者など日本人雇用者もいたため、皇太子ニコライの訪日当時、すでにロシア語を解する多くの日本人が稲佐にいたと考えられる。温暖で風光明媚、文化的水準の高い長崎、とりわけその稲佐地区は、極東に勤務するロシア・エリートたちにはよく知られた場所で、皇太子ニコライ訪日後の 1890 年代半ばには、ロシア人向けホテル Весна́（経営者は道永えい=稲佐お栄、のち諸岡まつが経営）さえ開設されている。また、日露戦争後、捕虜となったロシア海軍士官・水兵 9,000 人以上が稲佐地区に滞在していたことも知られている。稲佐にある悟真寺は現在でもロシア人墓地があることで有名で、このロシア人墓地には、ゴルバチョフ・ソ連大統領が 1991 年に訪日した際に訪問している。悟真寺とロシアの縁はプチャーチン来航時の宿泊先だったことに起因している。

[14] 『京都府誌　上』京都府、1915 年、708 頁。京都では常盤ホテル（現在の京都ホテル）に宿泊した。ニコライには洋室があてがわれたが、それを断り、日本間に泊まった。その建物は現在の安養寺に移築されている。市内では、西陣の川島織物を見学したことがわかっている。このとき、二代目川島甚兵衛が製作した綴織（つづれおり）を背景に写真を撮影している（写真は現存）。夜は、八坂神社近くの祇園のお茶屋「中村家（現在の中村楼）」を密かに訪ねており、その部屋も現存している。

[15] ギリシア王子ゲオルギオス（Πρίγκιπας Γεώργιος της Ελλάδας　1869 年 6 月 24 日～1957 年 11 月 25 日）。父親はデンマーク王子からギリシア国王となったゲオルギオス 1 世（Christian Wilhelm Ferdinand Adolf Georg, Γεώργιος Α΄ της Ελλάδας, 1845 年 12 月 24 日～1913 年 3 月 18 日）、母親はロシア皇室出身のオリガ・コンスタンチノヴナ（Óльга Константи́новна, 1851 年 9 月 3 日～1926 年 6 月 18 日）で、ロシア皇帝アレクサンドル 2 世（Алекса́ндр II, Алекса́ндр Никола́евич Рома́нов, 1818 年 4 月 29 日～1881 年 3 月 13 日、ニコライ 2 世の祖父）の弟コンスタンチン大公（Константи́н Никола́евич, 1827 年 9 月 9 日～1892 年 1 月 13 日）の娘である。また父親のゲオルギオス 1 世の妹マリアは皇太子ニコライの母親である。したがって皇太子ニコライとギリシア王子ゲオルギオスは従兄弟（いとこ）同士である。

[16] ニコライ一行を一目見ようと見物客でごった返す市街地の旧東海道を左折したところで、事件は起きた。犯人を取り押さえたのは、車夫の北賀市太郎、向畑治三郎の二人で、のちに彼らにはロシアから勲章が与えられた。琵琶湖文化館にはサーベルと血染めのハンカチが残っている。ボリシェヴィキ政権成立後の 1918 年 7 月 17 日に射殺されたニコライ 2 世とその家族の遺体が第 2 次世界大戦後、処刑地のエカチェリンブルクのイパチェフ邸の近くの森で発見され、1994 年に DNA 鑑定により間違いなく本人のものとされたが、このときの DNA 鑑定の材料に使用されたのがこの琵琶湖文化館に所蔵されるハンカチに残されたニコライの血痕であった。

て少しも腹を立てていない。」[17]

明治天皇が東京から急遽京都の宿舎に見舞いに駆けつける[18]。

5 月 16 日　日本旅行（上京）を中止し、ヴラジヴォストークへ直行せよとの本国からの命令が来る。

5 月 19 日　明治天皇、アゾフ号に行幸。この日までに多くの市民からの見舞いが届く。ニコライ、離日。

6.3.3. ニコライ 2 世と日露戦争

ニコライの極東行幸は、ヴラジヴォストークでのシベリア鉄道起工式に皇帝の名代として参加することであった。

開戦直前の日記には日露関係についての具体的記述が少なく切迫感がない（政治から切り離されていた？）。

1904 年 2 月 9 日開戦時の日記は「日本軍の厚顔な行為」と記しており、津田を狂人と書いた以外のもう一つの日本人に対する罵りの言葉であった。

---

[17] 本人の日記の記述ばかりでなく、大津事件の後もニコライの日本に対する感情が変化しなかったことを伝える資料は少なくない。例えば、1891 年 8 月にペテルブルク郊外に帰着したニコライを出迎えた日本の西徳二郎駐露公使は、「我邦ニ対シテ悪シキ感シハ毛頭保タレサル趣」と報告している（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 15 号「露国皇太子待迎ノ件」）。また、翌 1892 年 1 月 20 日、西公使がアニチコフ宮殿にニコライを訪問し、明治天皇の親書、日本の古い武器一式などを贈呈した際、ニコライは、「おほ（お）きにありがた（と）う」と日本語で感謝の意を伝え、「予ハ貴国ニ対シテ誠ニ好キ感情ヲ保テリ」と繰り返し述べたことが報告されている（西公使より榎本外務大臣宛機密報告第 1 号、1892 年 1 月 21 日）。以上は、外務省外交資料館特別展示「日露関係のあゆみ：1855-1916」の解説に基づく（http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_russia_2005/2_2.html〔2011 年 5 月 23 日アクセス〕）。

[18] 大国ロシアの皇族を日本の警察官が襲うという前代未聞のこの事件で、国内は騒然となったが、天皇の見舞いを皮切りに、日本全国からさまざまな見舞い品がニコライのもとに届けられた。京都では、川島織物の川島甚兵衛が謝罪の気持ちを込めて、双頭の鷲（ロシア皇室の紋章）と菊の紋章（日本の皇室の紋章）が描かれた縁取りのある、「犬追物」の図柄の、畳 6 畳敷きほどの大きさの綴織壁掛を寄贈している。これはエルミタージュ美術館に現存しており、職人が 7 人がかりで 1 年半の歳月をかけて制作されたと言われている。また川島は等身大の舞妓人形も贈ったとされる。いずれにせよ、綴織壁掛は美術品として見ても見事な作品で、これをきっかけに、川島織物はロシア皇室御用達となっている。また寺院の灯篭が 1 対贈られたが、これは徳川ゆかりの東京の増上寺清揚院殿のものと言われている。他方、日本政府は、この事件によりロシアとの関係が悪化することを恐れ、内閣・元老らを中心に、犯人に対して旧刑法第 116 条（大逆罪）を適用する動きがあったが、大審院院長・児島惟謙（こじま・これちか）が通常謀殺未遂を適用するよう主張し、その結果、1891 年 5 月 29 日、大審院は無期徒刑（懲役）の判決を下した。この判決後、青木外相は辞職し、後任には初代ロシア公使だった榎本武揚が任命された。大津事件についての同時代の記録は、尾佐竹猛『大津事件』岩波文庫、1991 年に詳しい。